みんぱくリポジトリ
国立民族学博物館学術情報リポジトリ National Museum of Ethnolo

イギリスにおける民族音楽学の研究動向：学際的共同研究の取り組みを中心に

メタデータ	言語: ja 出版者: National Museum of Ethnology 公開日: 2020-03-24 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 神野, 知恵 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.15021/00009504

イギリスにおける民族音楽学の研究動向

―― 学際的共同研究の取り組みを中心に

文・写真　神野 知恵

調査目的と概要

民族音楽学（Ethnomusicology）では、学問の理念として、音楽に携わる人びとを一方的に対象化するのではなく、インタラクティブな活動を通じてその音楽文化への理解を深めることを推奨してきた。また、近年では学際的アプローチを通じて新しい切り口から音楽を捉えなおすことも強く求められている。そのためには個人研究だけでなく共同研究を行うことが必要だといえる。そこで筆者は、イギリスで活動する民族音楽学者に会い、さまざまなカウンターパートナーと行っている共同研究について取材することにした。イギリスを選んだ理由は、ロンドン大学東洋アフリカ研究学院（SOAS）をはじめ、民族音楽学の専攻が可能な大学や、民族音楽学者が所属する博物館や図書館などが日本に比べて多く（表参照）、British Forum for Ethnomusicology（BFE）などの学会活動も活発であり、その動向に注目するべきだと考えたためである。

表

イギリスで民族音楽学者が活動する大学や研究機関
・School of Oriental and African Studies (SOAS)
・City, University of London (CUL)
・King's College London (KCL)
・Goldsmiths College (GUL)
・Royal Holloway (RHUL)
・Cambridge University
・Oxford University
・Durham University
・Sheffield University
・Manchester University
・The British Library
・Horniman Museum and Gardens　など

今回の調査では2019年3月7日から18日までイギリスに滞在し、ロンドンとダラムの2都市において、独自性の高い研究活動を進めている計18名の民族音楽関係者にインタビューを行った。本稿ではそのなかで、ダラム大学とホーニマン博物館・庭園の共同研究プロジェクトに焦点を当てて紹介したい。

ダラム大学の研究動向

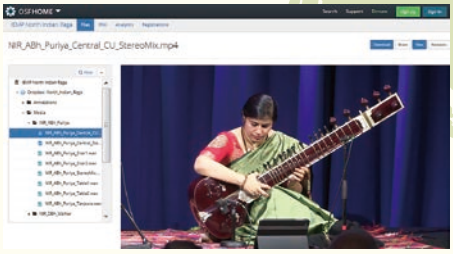
今回ダラムを訪問して初めて知ったことだが、ダラム大学では世界初の大規模な「オリエンタル・ミュージックフェスティバル」が1976年に開かれ、その後1979年、1982年にも開催された。このイベントには、世界中の著名な演奏者が訪れた。これをきっかけに、ダラム大学はイギリスの民族音楽学の出発点になった。ダラム大学音楽学部には現在も、民族音楽学者3名と人類学的アプローチによる研究を行う音響学者1名が常勤教員として所属している。

そのうち、マーティン・クレイトン（Martin Clayton）は、北インド古典音楽の研究者で、音楽学部内で組織されているミュージック＆サイエンスラボのリーダーとして活動している。このラボは音楽学者だけでなく、生物学、脳科学研究者、心理学者などの自然科学研究者によって構成されており、音楽と感情や記憶との関係性についての研究など、非常に多様なプロジェクトを行っている。

とくに、クレイトンが注力しているプロジェクトが「音楽演奏における複数演者間のリズム同調」（Interpersonal Entrainment in Music Performance）である。このプロジェクトでは、複数の演奏者が共に楽器を演奏したときに、リズム間の同調がどのように起きるのかについて分析することを目的としている。クレイトンは、このようなリズム同調という視点は音楽だけでなく一般社会での人間関係の考察にも応用可能であると述べている。分析対象には、クレイトンの専門である北インド古典音楽のほかに、マリのジェンベ、ウルグアイのカンドンベ、弦楽四重奏、キューバのソンとサルサなどの音楽が含まれる。この研究プロジェクトではまず、ミュージシャンたちの協力を得て演奏の録音・録画を行い、これを研究者のチームが分析し、映像資料の上に字幕で何分何秒にどんな行動が見られたかを記述する。このような分析を通じて、ミュージシャンが意識的に行っている行為だけでなく、無意識で行っているコミュニケーションや身体、心理の変化も記録できる。このアプローチはリズムの同調について人文・自然科学系の研究者が共に考察する点に意義があるといえる。

ほかにも、ダラム大学の音楽学部ではさまざまなジャンルとの共同研究を行っているが、演奏会や展示などの行事開催のみにとどまらず、そのプロジェクトで得られた成果を論文として発表し、ダラム大学のリポジトリやオープンサイエンス・フレームワーク（個人および共同研究のデータや成果物の整理、共有、一般公開を簡単な操作で行うことができる

神野 知恵（かみの ちえ）
国立民族学博物館学術資源研究開発センター機関研究員。専門は民族音楽学、民俗芸能研究。著書に『韓国農楽と羅錦秋―女流名人の人生と近現代農楽史』（風響社 2016年）、共著に『音楽を研究する愉しみ―出会う、はまる、見えてくる』（風響社 2019年）などがある。



オープンサイエンス・フレームワークに公開された「リズム同調」プロジェクトの映像。

無料のプラットフォームサイト）で公開している。筆者はこれまで韓国の農楽（プンムル）のリズムの分析研究を行ってきたこともあり、クレイトンとプロジェクトチームとの共同制作による映像とアノテーション（映像のタイムライン上に記述された解釈）や、論文を組み合わせて電子媒体でアウトプットする方法が非常に参考になった。

ホーニマン博物館・庭園の事例

ホーニマン博物館・庭園（Horniman Museum and Gardens 以下、ホーニマン）は、1901年に紅茶の貿易会社の経営者であったフレデリック・ジョン・ホーニマン（Frederick John Horniman）によって設立された。南ロンドンに位置するこの博物館は、自然史展示場、ワールドギャラリー、ミュージックギャラリー、水族館、庭園など多様なコンテンツを有する。とくに生活史資料や楽器資料の豊富さは圧巻であり、メッセージ性の強いキャプションや、実際に触って学ぶことのできるハンドリングコレクションが充実している。

筆者はホーニマンの学芸員で民族音楽学者のマーガレット・バーリー（Margaret Birley）から最新の共同研究プロジェクト「今作られゆく音楽」（Music in the Making）についての話を聞いた。このプロジェクトは、ホーニマン所蔵の楽器コレクションの知名度や活用度を上げることを目的として、2019年4月から2022年3月までの4年間にわたり、the Arts Council of England からの助成を受けて行われている。ホーニマンの教育部門ディレクター、ティム・コラム（Tim Corum）がリーダーとなり、バーリーと、SOAS などの大学から外部諮問委員として招聘された民族音楽学者が協力し合い、7本の柱のプロジェクトを同時進行させるという大型プロジェクトである。

そのなかには、南ロンドンを中心に近年流行しているグライム（grime）などのミュージシャンに、博物館所蔵楽器の音をサンプリングしてトラックを制作してもらう「南ロンドン音楽」プロジェクトや、ロンドンにおけるインド・グジャラート州のディアスポラ・コミュニティのミュージシャンと協力して研究を行う「南アジア楽器コレクション」プロジェクトなど、ホーニマンの立地と所蔵資料を活かした企画が含まれる。ほかにも、ウィキペディアや、MINIM-UK（Musical Instruments Interface for Museums and Collections）などの既存のウェブサイトとホーニマンの資料データベースとの連携により、所蔵楽器についての文字情報を充実させ、活用可能なかたちにするプロジェクトや、学校用・コミュニティ用の学習プログラム開発、歴史的鍵盤楽器のコンサートや調律に関するプロジェクトなどが含まれる。

このように、ホーニマンではさまざまなジャンルの協力者と共に共同研究プロジェクトを運営しており、それが博物館のアウトリーチと直結している点が注目される。とくに、アフリカ、アジア系移民が多い南ロンドンにおいて、所蔵品のソースコミュニティ出身のロンドン市民に所蔵楽器コレクションの存在を知らせ、利用と交流を促進することは現代の博物館にとって最も必要とされている活動である。そして豊富なコレクションをもとに多岐にわたるプロジェクトを創出している点は、国立民族学博物館でも学ぶところが多いと感じた。

今後の展望

上記以外にも、SOAS のキース・ハワード（Keith Howord）による各地のミュージシャンとの共同研究および CD シリーズ発行や、Goldsmiths College のバーリー・ノートン（Barley Norton）によるベトナム音楽の映像民族誌制作、大英図書館のジャネット・トップ・ファルジョン（Janet Topp Fargion）が世界中の民族音楽学者やコレクターと行っているアーカイブ構築とドキュメンテーションの試みなども特記すべき点である。今回の調査を通じて、イギリスをはじめヨーロッパ各国では研究が社会にインパクトを与えることが近年ますます重視されており、民族音楽学分野でも時代や環境の変化に合わせ、自然科学系の研究者との共同研究や、ローカル・コミュニティを巻き込んだ研究活動に大型助成が付く傾向にあることがわかった。また、大学ではヒップホップなど同時代の音楽を研究対象にすることが重視されるなど、民族音楽学研究者に求められる方向性も変わってきている。今後も BFE の大会に参加をするなどして、イギリスの民族音楽学の動向に注目していきたい。

ホーニマン博物館のミュージックギャラリー展示室（2019年3月）。